第１１回雲南の地域医療を考える
シンポジウム開催報告

平成２７年１２月

雲南地域医療を考える会

シンポジウム次第

13：00　開　　場

13：30　開　　演　開会あいさつ
主催者挨拶　　関　龍太郎　　雲南地域医療を考える会会長

来賓挨拶　　藤間　博之様　島根県健康福祉部部長

13：40　基調講演
演　題：「雲南地域における医療と介護の連携について」
講　師：濱本　直治　先生（はまもと内科クリニック院長）

14：20　休　　憩

14：30　パネルディスカッション
◆テーマ「雲南圏域における地域医療」
～これからの世代が考える私たちにできること～

◆パネリスト
角田　耕紀　　飯南町立飯南病院 院長
永瀬　正樹　　雲南市立病院 内科医長
小林　志保　　町立奥出雲病院 看護師
歌田　ちひろ　　訪問看護ステーションコミケア所長
高尾　英次　　デイケアはまもと理学療法士
恩田　禎子　　島根大学医学部医学科４年生

◆コーディネーター
矢田　明子　　ＮＰＯ法人おっちラボ代表理事

◆アドバイザー
鈴宮　寛子　　島根県雲南保健所所長

◆全体講評
大谷　順　　雲南市立病院院長

〈敬称略〉

16：40　閉会あいさつ
主催者挨拶　　足立　昭二　　雲南地域医療を考える会副会長

第１１回雲南の地域医療を考えるシンポジウム開催報告

平成２７年１１月１４日（土）雲南市古代鉄歌謡館（大東町）において、第１１回雲南の地域医療を考えるシンポジウムを開催しましたので、その概要について報告します。今回のシンポジウムは、今後の地域医療を担う若い世代が、これからの状況も含め今後の地域医療をどのように考え、何ができるかを話し合うことを目的に開催しました。

当日は、約２５０名もの方にご来場いただき、大変盛況のうちに開催することができ、各パネリストの皆さんからも今後の雲南地域の医療や福祉に対する熱い思いを語っていただきました。また、来賓として島根県健康福祉部から藤間博之部長様にお越しいただき、島根県の医療政策などについてご紹介いただきました。

第１部　基調講演

演題　「雲南地域における医療と介護の連携について」

講師　濱本　直治 先生（はまもと内科クリニック院長）

【総合司会（雲南市立病院看護師　大坂朋子）】本日の基調講演の講師、濱本直治先生をご紹介します。平成７年に島根大学医学部をご卒業後、島根大学医学部大学院へ進学されました。その後、県内の病院に勤務され、平成１８年に開業されました。

本日、濱本先生には、大変ご多忙にもかかわりませず、快く講師役をお引き受けいただきました。それでは、濱本先生よろしくお願いいたします。

【濱本氏】紹介にあずかりましたはまもと内科クリニックの濱本です。今日は、日ごろ私が思っていることを少し話させていただいて、この雲南圏域、実際に私の当クリニックでやっていることを紹介させていただきたいと思っている。

雲南地域における医療と介護の連携という題でさせていただいて、医療と介護の連携が今言われ始めているが、背景にあるのが一番は高齢化ということ。高齢化で若い高齢者を支える人口がどんどん減っている。実際に雲南市の人口動態の予想も出ており、４万人ぐらいいた人口が２０４０年には３万人を切ってしまうということが言われている。

次に医療費の面についてであるが、３９兆円から４０兆円に達してきており、これを何とかしたいということで、安価で提供できる在宅に向けてのシステムをつくって行こうとしている。しかし、病院への強い依存体制ということで、今まで病院が治療と病気を治してそれから家へという形で、最期も病院で看取り、最期を迎える場所も病院ということが多くなってきていた。これが実際医療費が一番かかる。亡くなるときの医療費はかなりかかってしまい、多い人で１００万から２００万円ぐらい月にかかるというのが現状である。

この看取りの場所を医療機関から自宅を増やそうという施策が、医療と介護の連携を図って行くという方向づけだと思っている。いずれにしろ今の施設であれば４０万から５０万人の方の受け皿がなくなるだろうということで、在宅を進めることを今されているというのが現状だと思う。

在宅医療と介護を通じた新しい体制づくりがされてきているが、雲南市でいうと大東町は人口が１万４，０００人弱いるので、その中で地域に合ったものをつくっていこうというのが今の流れになっている。その中で、包括支援センターが介護とか医療を結びつけていきたいとされており、２４時間の体制で安心できる体制をつくっていきたいということになっている。そのためにデイサービスやグループホームがあり、介護の人材としてヘルパーさんに入っていただいて、おむつとか、排せつとか、食事の介助とか、食事の世話とかしていただいているというのが現状であると思う。医療的な面では、在宅医療は訪問看護で補っていきながら、介護と医療を連携して地域で独自の地域に合った連携システムをつくっていけたらというのが今の流れになっていると考えている。

在宅医療と介護の連携は、医療と介護は保険制度が違い様々な職種が入りまじっている状況なので、なかなか意識の共通が難しい。患者サイドとしては自宅で最期を希望される方が６割から８割いらっしゃるということで、その場を応援しそこで何とか自分らしい生活を続けられるようにしていきたいと思う。そのためには、いろいろな職業、業種、職種で医療と介護を提供できるように、今までの流れとしては市町村が中心となってやっていたが、市町村だけで包括ケアシステムをやっていてもなかなか医療との連携がうまくいっていなかったので、地域の医師会とかと連携の体制を構築しようとしている自治体もある。

在宅医療と介護のまとめであるが、高齢化が進み社会構造が変わっていくと、医療の側が在宅を進めていくような形をとっていくということになる。あとは、病院ではなく家でサービスが続けられるシステムを、その地域に応じた地域包括システムをつくって行くという流れである。

次に、私が考える在宅医療の問題点としては、家族のケアが大切ではないかと思っている。患者さんに対する診療も大切であるが、介護者とか家族に困っていることはないですかという相談をさせてもらうことが必要だと思っている。家族の方がそれで間違っていないか、間違っているという不安を抱えておられれば、不安を取り除いてあげる。苦しいようであれば息を抜いて休ませてあげ、家ではやはり耐えられなくなったら病院にお願いする。幸い雲南病院がすごく快く引き受けてくれる。今までも一度も私がお願いしたことを断られたことがなく、非常に雲南病院には感謝している。夜遅く１時だろうと２時だろうと、患者さんがもう耐えられないとなれば、雲南病院に連絡して診てもらっている。患者さんはとにかく不安でいっぱいであるので、不安を最大限に想像して理解し、それに対して適切に対応できたら

と思っている。

次に訪問診療であるが、実際には２４時間の構築は困難だと思う。特に１人でやっているところは無理である。私は妻がいるので何とかやっていけるが、年中無休はやはりつらいと思う。実際７０代の先生方が看取りとかもやってくださっていて、そういう先生には頭が上がらないと思っている。

もう一つは、複数の医師での連携ということを厚生労働省が言っており、私も出雲と松江の先生と一緒に連携しているが、実際は思いが大分違っていて、私は家で最期までと思われた患者さんのご家族と患者さんを支えていきたいと思っているが、そういうふうな考えの方はまだ少数派であり、基本的には松江とか出雲であれば在宅というよりは施設におられる患者さんが多く、そこの施設から何か悪くなったらすぐ病院へという考えでおられる。

最後に、私たちが目指している診療所というものがあって、日々安心して過ごしていただけたらと思っている。最期を迎えられるときに家族のきずなが強まるお手伝いをさせていただきたいし、それで感謝の心を持ってお別れできるような最期を迎えられることができたらいいなと思っている。若い人たちにもぜひこういうことを支えていただいて、実際コミケアとか、２４時間対応してもらってすごく助かっている。実際２４時間やるのは辛く、病院にいるときはドクターやめたいと思っていた。しかし、在宅を始めてから思ったのは、患者さんが本当に感謝をしてくださり、やはりそこだなということだった。だから、皆さんにもお願いしたいことがあるが、救急外来とか行かれたときに、感謝の気持ちを当直の先生や看護師さんとかに言っていただけたらいいなと思う。そうするとお互いの関係がすごくうまくいくと思っている。実際、当直だけをやっているのではなく、次の日の診療もやっておられるので、疲れ切っておられると思う。だから、ちょっといらいらするというのは十分自分も理解できるので、そういうところをちょっと協力していただけると雲南地域の全体がうまく回っていくのではないかと思う。

第２部　パネルディスカッション

テーマ　「雲南圏域における地域医療」

～これからの世代が考える私たちにできること～

パネリスト（敬称略）

飯南町立飯南病院院長	角田　耕紀
雲南市立病院内科医長	永瀬　正樹
町立奥出雲病院看護師	小林　志保
訪問看護ステーションコミケア所長	歌田ちひろ
デイケアはまもと理学療法士	高尾　英次
島根大学医学部医学科４年生	恩田　禎子

コーディネーター

ＮＰＯ法人おっちラボ代表理事	矢田　明子

アドバイザー

島根県雲南保健所長	鈴宮　寛子

第２部のパネルディスカッションでは、最初に６名のパネリストの皆さんにそれぞれ自分の思いや、地域医療に対する考え方、これからどのようなことをやって行きたいかなどについて発表していただき、その後ディスカッションを行いました。

【角田氏】４月から飯南病院の院長になりました角田耕紀と申します。

今日は「飯南ビジョン」って何かすごく大きな題名をつけたが、半年余りやってきて、色々な思いがあったり、これからどのように進めていこうかというところを少し皆様と一緒に共有したいと思う。

まず、医療を考えるっていうことで、キーワードとして総合医とプライマリーケアをあげてみた。皆さんも聞いたことは多少あるかもしれないが、総合医は頻度の高い疾患とかけがや、予防、保健、介護、福祉の連携、そのような幅広い問題について、その地域の医療体制の中で適切な初期対応と必要に応じた継続医療を全人的に提供できる医師というような定義だと考えている。一方、プライマリーケアは患者の抱える問題の大部分に対処ができ、かつ継続的なパートナーシップを築いて、家庭及び地域という枠組みの中で責任を持って診療する臨床医である。私は１６年医者をやっているが、総合医という言葉がひとり歩きしているかもしれないが、一人で全部の病気を診るということはなかなか難しい。診療能力というものは重要だが、もっと大事なことは懐を開いてそれを診ようとするとか、自分に解決はできないかもしれないがまずは相談に乗る気があるか、そういう気概があるかというところがすごく大事な資質の一つで、単なる振り分けではなく実践的な臨床医であるということが大事だと思っている。

地域医療のニーズと総合医ということで、総合医の１０カ条というものを考えてみた。１つ、何でも診る、けがも病気も診る。２つ、気軽に診る、これはかかりやすさにつながると思う。３つ、誰でも診る、子供からお年寄まで男女問わず診る。４つ、いつでも診る、２４

時間３６５日。５つ、どこでも診る、病院でも診療所でも施設でも自宅でも。６つ、しっかり診る、全人的、総合的な愛を持ってしっかり診る。７つ、みんなで診る、チームでみんなで力を合わせて診る。８つ、周りも診る、家族も地域も診る。９つ、ずっと診る、色々な人たちのそれぞれのステージで診る。最後、無理して診ないということ、要は引っ張ることで住民さんのデメリットになってはいけないので、適切な医療機関に連携をとって紹介なりお願いをする。そういうコミュニケーションも大事だということで１０カ条を上げてみた。

当院の役割としては、プライマリーケアというところに総合医というものがあるが、医者に限らず看護師、検査部門やリハビリなど全体で協力し合って対応していくという形で頑張ろうと思っている。

地域医療は非常にやりがいがあり、地域医療という言葉が適切かどうか分からないが、総合医やプライマリーケアというところはやりがいが非常にあっておもしろいと実感しながら仕事をしている。このようなところを若い人たちにぜひ経験していただきたいと思っており、その上で飯南病院はどのようにして行くかというところで、総合性を持って柔軟に、愛情を持ってコミュニケーションをしっかりとりながら、向上心を持って色々なところでやっていきたいという思いを持ち、バランス感覚のすぐれた医療人を育成したいと思っている。

最後に、飯南ビジョンと書いたが、総合医が実践するプライマリーケアは非常にコストパフォーマンスがいいと思っているので、そういう医師と一緒に仕事をしたい。それから地域住民から便利がられる医師、飯南町に合った身の丈に合った医療体制をつくって行きたい。色々とつらい時代だとか厳しい時代だと言われているが、ピンチをチャンスに変えられるようなポジティブな考えで、みんなで協力してやって行きたいと思っている。

【永瀬氏】雲南市立病院の内科の永瀬といいます。

これから高齢化社会というものが非常に問題になってくることだと思う。

雲南市においても、やはり高齢化が非常に進んだ地域であり、高齢化社会に対する対策は絶対的に必要だと思う。よく高齢者に優しい社会づくりと言われるが、本当にそれだけでいいのかと私は考えたいと思っている。土台がしっかりしてないと支えることはできので、高齢化社会が進むからこそ若者をしっかりサポートする環境づくりを少し考えたほうがいいと思っている。

高齢化社会をどう支えるのか、それを支える世代に安心した医療を提供するということをまた考えないといけないし、医療、介護職をどう確保するのかも考えないといけない。医療人の確保の話もあったが、都市部思考の人が増えているけれどもやはり地方で頑張りたいという方もいる。そういう方を受け入れる受け皿として雲南病院が頑張っていけたらと思っている。

安心できる医療を提供するためにはやはり予防医学が重要で、病気にならないようにするのが一番だと思う。６５歳以上を高齢者と言うが、６５歳以上で元気な方はたくさんいる。逆に４０代、５０代でも脳出血とかで体か不自由になられる方もいる。しっかりした体のケアをできれば健康寿命は伸ばせると思うので、予防医学に関して啓発していく必要があると思っている。

最後に、高齢化社会だからこそ若者の夢や安心を持って過ごせるまちづくりを医療側としてサポートできたらと思う。それが出産であったり子育てであったり、また、病気になって困ったときにすぐに病院に来てくださいと言える優しい病院をつくって行きたい。これらの不安をなくすことで、ここに住んでも大丈夫だと思うことができるし、そうなってくると、長い目で見て高齢化社会を支える基盤づくりになると思う。これからも続く高齢化社会を悲観しても何も生まれるものはないので、今自分達ができることを一生懸命やっていけたらと思っている。

【小林氏】町立奥出雲病院療養型病棟で平成２３年４月より施設ケアマネジャーとして勤務しています。今日は、当施設の現状、対策、課題について発表させていただく。

奥出雲病院の病床数は１５８床で、そのうち療養型病棟（虹の郷）は６０床、医療療養２４床、介護療養３６床、個室は６床である。

医療依存度の高い入所者様が多く、現在経管栄養の方が２１名で、通常注入の場合は朝４時、昼１１時、夕１６時から２時間かけて栄養剤を滴下している。

経管栄養に関して、対策の一つを紹介する。経管栄養の方の内服薬を注入するとき、簡易懸濁法を以前より取り入れていたが、今までは注射器で溶解していたため、外筒や内服薬を詰めるのに時間を要していた。この対策として、４月から簡易懸濁ボトルを導入した。簡易懸濁ボトルは注射器の使用よりも価格が抑えられ、看護業務の時間短縮にも繋がっている。

次に、終末期ケアについて報告する。

当施設は１０月より機能強化型への届け出をしており、特に終末期ケアについて体制を整備してきた。終末期について、以前よりさらに主治医から家族へ病状説明をし、経過についての説明や苦痛の緩和に取り組むことで、終末期の方の家族と医師、スタッフとの信頼関係を築くことができていると感じている。

次に、在宅支援についてであるが、当施設では、インスリン注射が必要な方や気管切開を

されている方など、医療行為が必要な方を優先的にショート利用していただいている。介護負担軽減だけでなく、栄養管理、服薬管理などの目的で利用していただき、在宅介護支援をしている。また、奥出雲町では毎月病院隣の健康センターにて地域ケア会議があり参加しているが、その中で困難事例等の事例検討を通じて地域課題、地域資源について情報共有している。

最後に、私は医療依存度の高い方の入所施設の必要性を強く感じている。短期入所、療養介護サービスを通して、医療依存度の高い在宅介護者の本人、家族を今後も支援していきたいし、地域貢献活動を通じて、介護技術などの普及活動に今後取り組み、地域包括ケアシステムにおいて在宅生活支援に取り組みたいと思っている。

【歌田氏】訪問看護ステーションコミケア所長の歌田と申します。

私たちにできること、若手として、訪問看護師として、訪問看護というのは自宅で看護や医療を提供するけれども、そうした訪問看護師として若手として私たちにこれからどういうことができるのかということを考えてきた。その中で、地域医療を支える仲間づくりというのがとてもキーワードになると思い、今日発表させていただきたく。

訪問看護ステーションコミケアの事業所の説明をさせていただく。訪問看護ステーションは雲南圏域内に全部で６カ所登録がり、７月１日から当事業所を開設したので、全部で圏域では７カ所になった。コミケアの特徴は、ＩＵターンの看護師３名で、それぞれが県外の総合病院で経験を積んできた看護師で行っている。医療保険と介護保険両方に適用しているので、介護予防から自宅の看取りまでさまざまなケースに対応している。２４時間３６５日緊急連絡対応体制をとっており、例えば夜中に何かおなかが痛くなったとか、そういうことでも電話していただければ電話対応して、必要であれば訪問するという体制をとっている。

私たち地域医療を担う訪問看護師としてはどのような役割があるかについてであるが、まず一つは、利用者さんたちが住民の皆さんが住みなれた場所で過ごせるような環境づくりとして、家庭に医療と看護を届けるということが役割としてあると思う。もう一つは、病との歩み方を一緒に考えていく。受け皿となる家族、本人の選択と心構えということがあるが、なかなか病院だけでは決められなかったり、一旦退院して今度外来通院した時に、なかなか短い外来の時間で全部聞ききれなかったり、思いが言えなかったりということをよく聞く。そうした中で、一緒に選択や心構えを支えていく。私たちは時間が取れるので、家庭に行ってそういったことをできるのではないかと思っており、その酌み取った思いを地域から自宅から連携先につないでいくことが訪問看護師としてとても重要なのではないかと考えている。

訪問看護師として、そして若手として、これから私たちにできることということで、地域医療を支える仲間づくりができるのではないかと思っており、今コミケアで取り組んでいるようなことを少し紹介したいと思う。

この仲間づくりについて３つ取り組んでいることがある。１つ目は、個として訪問看護師として専門性を高めるということで、生活の視点、医療的な視点を踏まえた看護ケアがしっかりと提供できるような体制をつくるため、県内外の訪問看護のネットワークを広げて座学研修や現場研修に参加したり、継続的に勉強会や症例検討を開催している。

２つ目は、チームとしてであるが、施設や職域、地域を越えて、みんなで育む環境ができたらいいなと思っており、まずは縦の連携ということで、学生ボランティアさんなどを取り入れてイベントをしたり勉強会をしたりしている。あとは横のつながりということで、他職種との勉強会、介護士さんやリハビリの方、あとケアマネジャーさんだったり、いろんな人を巻き込んで勉強会や交流会を開催したりし始めている。

３つ目は、住民さんも含めてということで、幸せな人があふれるまちづくりということで、医療職者と住民さんが対話する機会を作っていきたいと思っている。訪問看護師として、地域に働いている看護師としてもっともっと身近な存在になり、どういう悩みを抱えているのかということを知っていきたいということで、どんな生き方をしたいかとか最期を送りたいかということを支えられるようになっていきたいと思っている。今はサロンに行って相談会やイベント、地域での聞き取りなどに行ったり、訪問看護や在宅医療を通して住民さんと対話するということをしている。

最後のまとめであるが、これからの世代である私たちができることは、一緒に地域医療を支える仲間づくりだと思っている。そして次に、その骨組みとなるチームが輝く地域医療の魅力化と可視化でみんなで挙げていき、そしてその肉となる住民さんも巻き込んで、一緒に医療、介護、そして地域が連携し合うような幸せなまちづくりをしていきたいなと思っている。

【高尾氏】デイケアはまもとで理学療法士をしている高尾といいます。

最初にデイケアはまもとの紹介をさせていただくと、在宅での生活をサポートし、かかわる皆さん、利用者さんとか家族が笑顔になるようにという思いでデイケアはまもとは行っている。また、当施設の強みは、クリニックと併設しているので情報の共有がすごくしやすいことだと思っている。

地域連携ということでは、すごく大事にしているのが地域のケアスタッフの方との情報交換やスキルアップを定期的に開催していることである。その中で、月に１回地域の若手の方に来ていただいて、現場の課題であったりこういうことに困っていることに対して、みんなで共有しながら、話し合いをしながら個のレベルを上げていくこともやっている。

地域との関わりについてであるが、地域でのつながりを今後強化していかないといけないと思っており、ネットワークづくりという中で地域の課題とかを把握しながら地域づくりと資源の活用や育成をして行きたい。ネットワークを作り連携を共有することで、弱いところ

を補えることもあると思っているし、方向性を統一することや視野が広くなることもできると思っている。

私は理学療法士という立場なので、そういう立場から考えるとリハ職だけではなくて、看護師さんや訪看さん、お医者さんケアマネさん含めていろんな方と顔が見える連携ができればいいと思う。

ネットワークをつなげるために自分も気をつけていることであるが、行動力を持つということを若手には持ってもらいたい。自分が踏み出さないと見えない部分はすごくあるので、自分が一歩踏み出すこと。それと、話す力、聞く力が大切である。自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞くことがすごく大切で、それを分析し、解釈して色々なケアにつなげたり、チームで一つにしていくことが大事だと思う。あとは広げる力である。自分がいいと思ったことや感じたことをチームや職場で話すことが広がっていくことにつながると思うので、広げる力も大事だと思うし、楽しむ力ということも大事だと思う。

まとめとして、ネットワークを構築することは地域医療とか介護を強くするためにはすごく重要だと思うし、顔の見える連携というのは言葉だけではいけないなと思う。自分から飛び込まないと何も変わらないので、これからも自分で飛び込みながらやって行けたらいいかなと思う。５年後、地域力が試されるのでその部分を強くするために、ワン・フォー・オール・オール・フォー・ワンの気持ちを持ちながらやって行きたいと思っている。

【恩田氏】島根大学医学部の４年生の恩田と申します。

私は、雲南市大東町出身で実家もこの近くにあり、小学校、中学校と普通に卒業した後、松江南高校に入学し、平成２４年に島根大学医学部に地域枠という推薦をいただいて入学させてもらった。

地域医療についてであるが、私個人として考える地域医療のおもしろさというものがある。それは、まず興味を持っている医療分野が勉強できるということである。これは専門分野にこだわることなく、必要とされている医療を提供するという地域医療のスタンスに私は興味を持っているし、そうなりたいなと思っている。それは、地域の先生方を見てそういう地域医療の魅力があるなと思った。あとは、この地に住みなれているということで、単純に住みなれているということだけではなく、地域に愛着を持つということはその地域に人を呼び寄せることにつながるのではないかと思う。そして、まちづくりに携わることができるということで、医療と福祉、行政の職の垣根を超えた連携をすることで効率のよいまちづくりができると思う。これができるのは都会ではなく、コミュニティーの比較的小さい地域だからできるのであって、これは一つの魅力じゃないかなと思う。そして、生活に基づいた医療が求められること。つまり、患者さんの生活クオリティ全体を考えて医療をすること、さらには人と人のコミュニケーションが密に取れること、これによって血の通った医療というものができるのが地域医療のよさだと思う。

最後になるが、どうしたら地域に人が集まるのだろうかという問題に対して、学生の私が考える提案をさせてもらう。まずは、医学生の地域医療実習の内容に学生主体の市民講座を含めるという提案である。例えば、１週間の地域実習のうち最後の１日はどこかの公民館で学生が主体となって市民講座を企画して実施させるといったものはどうだろうかと考えた。学生が主体となってこのような企画をすることで地域医療そのものにさらに興味を持ってもらうことができると思うし、地域に愛着を持たないとそこに定住したり就職したりというのはなかなか難しいと思うので、学生にとっていい機会ではないかなと思う。

２つ目の提案は、町の暮らしを楽しんでおられる先生を見ること。その地域の生活自体を楽しんでおられる先生の姿を見るというのは、学生にとって病院を選ぶ一つのきっかけになるのではないかなと思う。

★ディスカッション

【矢田氏】パネルディスカッションを始めます。

パネリストの皆さんから、先ほどそれぞれにお話があったことを上げさせてもらう。まず連携について４人、仲間を見つけてつながり、垣根を越えて職種を越えてつながる場を自分たちでつくるというキーワードが４人のパネリストから出ていたので、実際に集まる場とか連携とかをやってみたらこういうところで困ったとか、逆に協力いただきたいみたいなところがあれば、少しコメントをいただきたい。

【高尾氏】連携をとるに当たって、ＡＮＴ．Ｓという勉強会を立ち上げさせていただいて、雲南地域だけではなくて隠岐のほうからも来られたり、益田、出雲、松江のほうからも勉強会に来ていただいて思いを共有しているが、困るということは今のところ見当たらない。ただ、やはり思いは共有しているが、現場でそれをほかのスタッフに伝えていくというのはなかなか難しかったり、動作ケアなど専門的な知識の部分も勉強しているので、医療的なことで学びたいというスタッフもいる。そういうところで医師や薬剤師などとも繋がりを持てればもっといいかなと思っている。

【歌田氏】連携ということで、私たちコミケアでも勉強会やシェア会みたいなことをやっているが、私たちが課題として思っていることは人集めということである。そういう部分で、最近はＡＮＴ．Ｓさんの勉強会などにもコラボさせてもらって色々な方と繋がり、顔が見える連携やお互いがどういう思いを持ってどこで働いているのかということを知るところから始めている。これからもっとネットワークを広げて、その場を生かしていけるような繋がりを持てたらと思っている。

【小林氏】連携ということで、奥出雲町は地域ケア会議を行っているが、地域会議ではグループワークの中で開業医の先生や各サービス事業者さんと一緒に事例検討をしており、そこ

で事例以外のことも出して細やかに話しているので、この地域ケア会議等も連携としての活用手段ではないかと思っている。

【永瀬氏】　雲南市立病院では開業医の先生との連携ということで、後方支援病院として開業医の先生が普段診ている患者さんが状態が悪くなったとき、すぐに病院で受け入れるという体制をつくっている。

【角田氏】飯南病院は小さい病院なので、各多職種の連携は非常にとりやすい環境にあると思う。連携をとった方がいいということは分かるが、連携が目的になってしまうこともありがちで、結局その目的が患者さんや利用者の方が、連携とってもらってよかったと思ってもらわないと意味が無い。

【矢田氏】恩田さんの立場から、思いを持った仲間の学生を皆さんと繋ぐならこんなことができるのではないかと思うことはあるか。

【恩田氏】地域には興味はあるが、地域に行く勇気がないというか分からないという学生はたくさん見ているので、私ができることとしては、学生として色々な話を聞いたり言ったりという場を持っているので、その情報を県外出身の医学生などに話す機会を持たないといつまでたっても県外の学生には分からないという気はしている。地域枠の学生と地域の先生方との交流会は毎年あり、私たちはその繋がりで地域に先輩の顔を知っているから戻ろうと思うけれど、それだけではこれからは足りないかなという気がしているので、私がコネクターとなる必要性はあるかなとは思っている。

【鈴宮氏】お話を聞いていて、要するに有志の仲間の民間活動的な勉強会とパブリックな地域ケア会議がどうコラボするかということが一番焦点かなというふうに思った。地域ケア会議はここの地域で見学したり参加させていただいて、すごくスキルがあって熱心に取り組まれている。そういう中で、皆さん方の民間の活動から起きてくる課題を投げたり、また、パブリックでやったところから持ち帰ってするというようなピンポンができるのがいいのかなと思ったことと、保健所は実は地域医療というところには市町村が中心に進めてきたところにおくればせながら参加してきたが、それで気がついたことは、今言ったような広域的な課題や専門的な話をもっと聞きたいとかという課題を抱えていると思った。そういうところを今度はすき間産業で保健所がバックアップしていく課題だと今日聞きながら思ったので、これからは市町と協力しながら保健所が進めていければいいのかなと思っているす。

【矢田氏】今度はぜひ住民の方にこういうところをお願いしたいとかあれば、少しコメントをもいただきたい。

【恩田氏】これまで地域医療を支えてくださっていた先輩の看護師さんや先生方に、私たちももっと指導をもらいながら、そして感謝の意を伝えながらそういう場に携わって行きたい

と思っている。

住民さんにということで、私たちまだまだ若手で思いなどを全て酌み取れてない不安とかもたくさんあるので、地域で暮らしていく中で色々と経験をされたことを私たちも教えてもらいながら一緒にケアの輪を広げていきたいなと思っている。また住民さんからの意見などもどんどん聞きに行くので伝えていただきたい。

【鈴宮氏】今日、シンポジストの方たちが前向きに活動されてるのを聞かれて、ぜひ今後お世話になったときにはお礼の気持ちを伝えるということをして欲しいと思っている。市立病院や町立病院等の救急外来で働いている医者は、３０数時間働き続けの状態でやっているので機嫌の悪いときもある。それをしないように努力はしているが、患者さんから一言感謝の言葉を言われると全部忘れてすごく居心地がよくなる。医者が地域の中で医療を続けていくための住民としてできることは、ありがとうということを伝えていただくことであり、それで病院や開業医の先生たちがこの地域で医療を続けてくださると思っているので、言葉に出していただきたい。

もう一つは何でも聞いて欲しい。医者はそう思っている。医者と患者さんとのつき合い方も人と人とのつき合い方と一緒だというふうに思っており、コミュニケーションがうまくいくと、本当にここの地域の中でドクターたちが生き生きといつまでも働き続けてくださると思っている。

【矢田氏】最後に一言ずつコメントをいただきたい。

【角田氏】医療者は、ここはこういう医療が必要であるとか、これはなくてもいいとか色々と考えるが、ぜひそういうところで住民さんのほうから、ここにはこういう医療が欲しいとか言って欲しい。飯南町では医療懇談会というのを公民館ベースでやっており、そこで膝をつき合わせて、そこの住民さんの必要だと思っておられることや、飯南病院に求める医療というものを聞いて回ろうかと思っているので、こういう機会に住民さんのほうからも声を上げていただいいて、一緒につくっていくというような形でこれからも進んでいければと思っている。

【永瀬氏】雲南市立病院では、出前講座や市民講座とかをやっているので、できるだけ興味ある方は参加していただいて、おうちナースになってもらいたい。それと、ここには年配の方も結構おられるとは思うが、若い人に病院行きなさいよと言ってもらいたい。働き盛りの人はなかなか病院行かないし、健康に過信される方が多いと思う。そういう人が病気になってしまったら非常に雲南地域としてもデメリットが多いと思うので、きちんと病院に行って体のメンテナンスをしてもらうように伝えて欲しい。

【小林氏】今日会場に学生さんの姿も見かけるが、看護配置数の関係で施設入所者数を制限せざるを得ないような状況などを報告させてもらったけれども、マンパワーがあればもっと質も量的にもより提供はできるという状況がある中で、病院、施設も生き生きと、そして看

護師を目指す方が一人でも多く勤めていただけるようになれば今のような課題もだんだん軽減できていくと思うので、ぜひ検討して欲しい。
【歌田氏】自分たちに明日からできること、あと会場の皆さんに今日伝えたいことということで、まずできることは色々な人の話を聞くことだと思った。やはり限られた地域資源の中で、自分たちに求められるニーズを満たしていく強みをつけるためには、色々な人の話を聞くことだなと思う。皆さんにしてほしいことは、ぜひ言いにくいことでも言って欲しい。このニーズを満たすために、自分たちが皆さんの役に立つためにとか、ぜひケアをみんなでつくり上げていくためにも皆さんの本音を聞かせてもらって、そこですり合わせをして一緒につくり上げていきたいと思っている。
【高尾氏】今日話を聞いて感じたことであるが、感謝の気持ちを持つということが明日からでもできることだと思う。若い世代はありがとうとか済みませんでしたという事を言いにくい年ごろだと思うが、感謝の気持ちを持って言葉に出すことが大事だと思う。
　それと、地域の声をどんどん言っていただきたい。多分言い易いことや言いにくいもあると思うが、言っていただけることで自分たちも分かる部分があると思うので、どんなことでもいいので言っていただきたい。
【恩田氏】私が明日からできることといえば同じ学生に伝えることだと思うので、今日色々な話を聞いて、本気で地域医療を考えておられる意識の高さを感じたし、それがおもしろいんだなと思ったので、そういう事を伝えて、実際に実習に来ることを積極的に進めて行きたい。
【矢田氏】最後に、会場に雲南病院を支えてもらっている病院ボランティアの事務局長の矢壁さんがいらっしゃっているので、一言感想をいただきたい。

★会場からの発言

【矢壁氏】本当に深いところまで言及していただき大変勉強になった。
　今日始めて角田先生の話を聞いたが、総合医について非常にダイナミックな話であったし、自分の思いや１０カ条というのは大変感動した。雲南病院でも外科系の総合医ということで対応されているが、本当にこれが大事だというふうに思っており、それに対して私たちが本当に必要なのは、ありがとうという感謝の気持ちをどうあらわすかということだと思う。
　そして、今日のテーマは連携と年齢というのもあったが、年齢については私も高齢であるが、ある程度年齢が行ってもやる気年齢というのでほとんどカバーできる。ここへ今日集まられた皆さんもぜひともやる気年齢で一緒に共有し、これから地域医療を頑張って行きたいという事を今日は感じた。
【総合司会】大変ありがとうございました。
　ここで雲南市立病院、大谷病院長より全体講評をいただきたいと思います。

【大谷氏】シンポジストの皆さん、それと最初にご講演いただきました濱本先生、大変ありがとうございました。

総評ということで幾つかお話しをさせていただく。まず、地域包括ケアシステムというものが必要な理由、高齢化が進んで少子高齢化が進んできているという、この状況をどうやって地域で乗り切るかという一つの命題がある。それと、団塊の世代が全て６５歳以上になり大量離職の時代になったが、そこをどうやって世代交代をしていくのかも一つの大きな地域にとってのテーマだと思う。そういう中で、まず濱本先生におかれては、かかりつけ医の立場でこの地域をどうやって支えていこうとされているのか、その覚悟をお聞きしたと思う。濱本先生のお話の中で、これで本当に我々は安心して地域で過ごしていけるなと思いをさらに強くしたのではないかと思う。また、病院がサポートしてくれるおかげで助かっているという話もあったが、私たちにとっては最大の褒め言葉であり、これをまた喜びとして職員一同共有してこの地域医療のためにさらに頑張って行きたいという気持ちになった。

次にシンポジウムであるが、若い世代で何ができるのだろうかということで、本当に涙が出るようなプレゼンが続いた。それぞれの地域で頑張っておられる若い方たちからの力強いメッセージがあったが、会場におられる高齢の皆さん方は本当に安心されたと思う。共通の言葉として連携や、思いを支え共有するということがあったと思う。最近の若い人たちはコミュニケーションがなかなか苦手で、連携などもとりにくいのかなと思っていたが、コミュニケーション能力が高く、そういう気持ちもすごく強いということが今日のシンポジウムの中で分かったのはすごく大きな成果だったと思う。本当に色々な立場の皆さん方がそれぞれの職種の垣根を越えてコミュニケーションをとり、角田先生が言われたように、連携をとるのが目的ではなく、皆さん方の地域での生活を支える、地域で何とかやっていきたいという覚悟を支えるためのシステムづくり、連携づくりをされようと彼らがしているというところはすごく心強く、すばらしいことだと思った。これから是非応援して行きたい。

今回のシンポジウムにおいてご講演いただきました濱本先生、熱い思いを語っていただいたパネリストの皆様、的確なアドバイスをいただいた鈴宮所長様、全体講評をいただいた大谷院長先生には、心より感謝申し上げます。また、シンポジウムにつきましては、次年度以降も継続して開催したいと思っておりますので、今後ともご協力いただきますようお願いします。

※なお、報告書の内容、表現につきましては一部編集しております。

雲南地域医療を考える会事務局

アンケートで寄せられた感想（一部抜粋）

〇基調講演について

・とてもすばらしい講演ありがとうございました。これから益々地域の医療が充実し、私たちのために役立つことを祈ります。

・病院での治療、在宅での治療、双方の具体的な事例を挙げて頂き、なぜ今在宅医療が推奨されてきているのか理解することが出来ました。地域医療を担うためには、様々な分野との連携が大切であることを再認識しました。貴重なご講演ありがとうございました。

・医療の現状、課題を聞かせてもらい、やはり大変な状況であると感じました。ただ、それを受け色々頑張っておられる事を知り、自分も出来る事を頑張って行きたいと思った。

・先生の診療に対する前向きな考え方、周辺スタッフ関係者との同等な立場で接して患者さんを診ておられることが分かりました。雲南でこのような医師が増えて行かれることを願います。

・先生の広い視野からの日々の診療、地域住民との繋がりを持った取り組みのお話しに感銘しました。やはり地域はみんなで支え感謝の気持ちを持って助け合って行かないと成り立たないと感じます。

・医療と介護の連携が大切だと分かりました。感謝の気持ちを持って良い関係を築けたらと思います。（雲南市：高校生）

・医療と介護の連携が必要不可欠なのだということが分かりました。医師のお話を聞く機会はあまりあることではないので、大変貴重な経験が出来ました。（雲南市：高校生）

〇パネルディスカッションについて

・医療の現状、課題を聞かせてもらい、やはり大変な状況であると感じました。ただ、それを受け色々頑張っておられることを知り、自分も出来ることを頑張って行きたいと感じました。

・それぞれの役割と、分かり易く説明された内容が良かった。学生さんの話もすごく良かった。すばらしい医者になってください。

・医大生の前向きな発言がすごいなと思いました。頑張って地元に残ってもらいたいです。

・地域を良く知り愛着を持って活動を進めておられ、夢のあるお話を聞かせてもらいました。これだけの人材がおられることに感激しました。

・コーディネーターの方が上手にまとめたり進行されたので、とても分かり易くポイントを絞ったパネルディスカッションだったと思います。

・私は将来看護師になり飯南町で働きたいと思っています。その為にも今日の講演に参加し、病院だけではなく在宅看護やヘルパーさんの事務所との連携の必要性や重要性が分かって良かった。

・ニーズに合わせて対応できる医療が提供できるように幅広い知識も大切ですが、得意分野を作りチームとして協力しながら頑張って行こうと思いました。（飯南町：高校生）

・高校生にとっては難しい報告でしたが、総合医の１０か条が頭に残っています。これは医師だけではなく看護師にも当てはまると思いました。総合ナースになりたいと思いました。（美郷町：高校生）

○シンポジウム全体に関しての感想

・自分の地域（安来市）では何が出来るかを考えるきっかけになった。まだまだ地域で何をしているか分からないことが多いと思った。圏域間で連携できる、しようとする気持ちが伝わりました。雲南圏域のまとまりを感じました。

・わが町（奥出雲町）もこのような機会があれば良いとつくづく思いました（会はあると思いますが、一般の方も含めたこのような会は無いと思います）。

・今後の連携が円滑になって行くことを望みます。自分に出来ることをやって行きたい。感謝の気持ち伝えて行きたい。

・色々な目線から聞くことが出来てとても良かった。なかなか出来ないこと、知らなかったことがたくさんあり、とても勉強になりました。熱意を感じた。

・様々な立場の方のお話が聞けて良かった。地域医療に熱い思いを持っておられる若い人がいてうれしかった。

・医療への思いを直接聞く機会はあまりないので、今回参加できて本当に良かったです。私も今後、社会に役立てるように頑張りたいと思います（雲南市：高校生）

・地域医療に関心があり地元の大学に進学したいと考えています。もうすぐ受験なのでこのシンポジウムが本当に参考になりました。私はまだ自分のビジョンが見えていませんが、今回いらっしゃった先生方たちのように地域に貢献して行けたら良いと思いました。（雲南市：高校生）

○地域医療に関しての意見・要望について

・今日はありがとうございました。若い人達が少しでも地域を考える機会があるように、こういう会は大切だと思います。

・情報発信（取り組み事例など）して、雲南の魅力、医療対策を住民の方に知ってもらうことが必要だと思う。

・医療機関の敷居を下げる。様々な職種、立場の人が気を使わないで情報交換し合い、医療に関しても討議できるようになれば良いと思います。核となるところがやはり必要で、それが雲南病院だと思います。一定のスタッフや情報を集めたステーション的なものがあればと思います。

・私は高校生ですが、普通に暮らしていると地域医療とは何か、具体的には何をして何が問題なのかほとんど分かりません。もっと情報が日常生活で入ってくると良いと思いました。

・シンポジウムはヒントがたくさんあると思います。もっとたくさんの人、住民、役所（保健師、ケアマネ）の人にも話を聞いて欲しい。

・若い人達が少しでも地域を考える機会があるように、こういう会は大切だと思います。

・雲南圏域の見本となるこのシンポジウムを今後も続けて欲しいと思います。

※アンケートにご協力いただきました皆さま大変ありがとうございました。いただきましたご意見は、今後の参考とさせていただきます。